

「あまりん」の萎縮症状発生の要因究明

農業技術研究センター（野菜育種担当）

キーワード：イチゴ、あまりん、育苗、萎縮症状

1 技術の特徴

「あまりん」（品種名 埼園い3号）の育苗において、葉縁枯れや葉柄が短くなり赤紫色を呈する苗の発生が確認された。症状が進行すると極端な葉の萎縮がみられ、枯死するなど苗生産に多大な支障をきたしている。そこで、発生条件を解明するため試験を実施したところ、高気温下の育苗において「あまりん」は、培土表面に対してクラウン部が埋没した苗で萎縮症状が発生する傾向が見られ、過湿状態の培土によって助長されることが示された。

2 技術内容

（1）萎縮症状の程度

萎縮症状の段階として、「葉縁枯れ」、「葉脈間の退色」、「芯葉の萎縮」、「枯死」の順で症状が進行した。なお、各症状は複合的に見られることが多い（写真）。

（2）萎縮症状の発生要因

育苗期間中、培土表面に対してクラウン部が「埋没」し、培土が「過湿」であると発生が多くなった。培土が「適湿」であっても、クラウン部が「埋没」していると症状の発生が見られるが、クラウン部が「露出」している場合は培土が「過湿」であっても発生は軽微であった。

萎縮症状の発生を抑制するためには、クラウン部を培土に埋め込むような採苗を行わず、育苗期間を通して、培土を適湿に保つことが必要である。

3 具体的データ

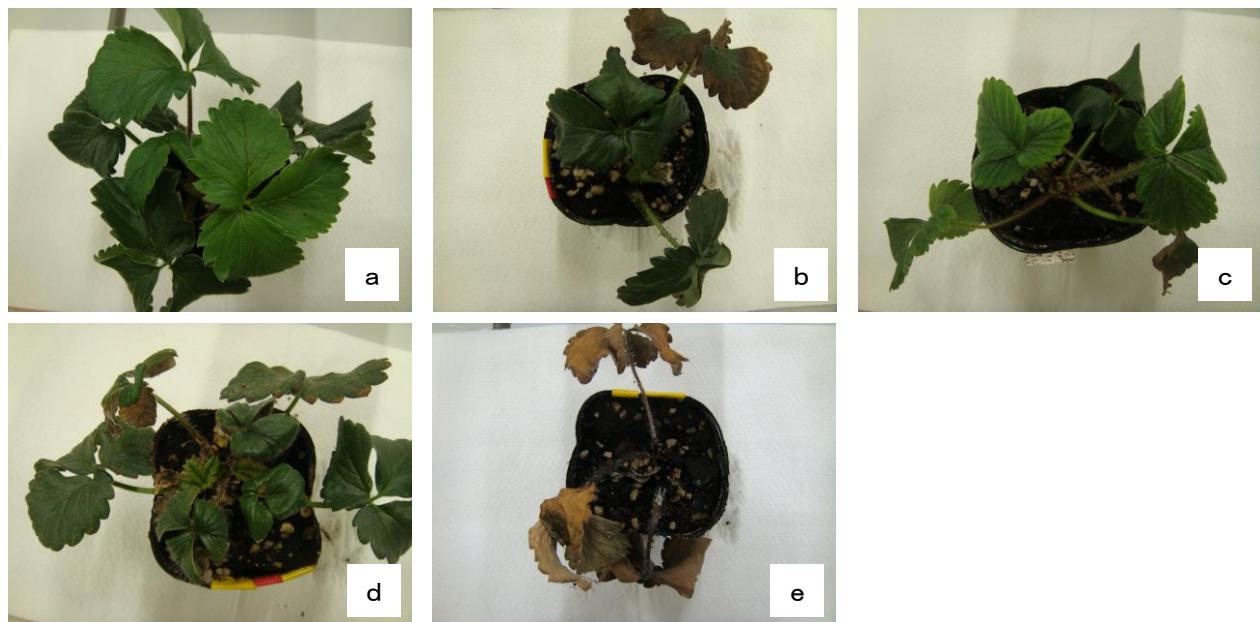


表 育苗開始から1か月後の発症状況

クラウン部 ^{注1}	最初期 ^{注2}	育苗期間 ^{注3}	症状			
			正常	葉縁枯れ又は葉脈間退色	芯葉の萎縮	枯死
露出	乾燥	適湿	5	0	0	0
		過湿	5	0	0	0
	適湿	適湿	4	1	0	0
	過湿	過湿	4	1	0	0
埋没	乾燥	適湿	3	1	1	0
		過湿	0	1	1	3
	適湿	適湿	2	3	0	0
	過湿	過湿	0	2	0	3

育苗は7.5cm黒ポリポットを用い、施肥はIB化成S1号(10-10-10)を各苗1粒(約1g)を施用した。各処理区の苗は2024年10月に親株から切り離し、明期14時間(30°C)、暗期10時間(28°C)の条件下で約1か月(2024年12月24日から2025年1月26日)栽培を行った。

注1 培土表面に対するクラウン部の位置

注2 ランナ一切り離し後、「乾燥」処理の苗が萎れるまで

注3 最初期を除く期間

※ 網掛けは枯死した処理を示す

4 適用地域

埼玉県全域

「あまりん」と水分要求量が異なる品種を栽培している圃場

5 普及指導上の留意点

- (1) 培土の乾湿は、使用している培土の配合やハウス構造によって異なるため、栽培地の状況を十分に把握して灌水量の過多を判断する。
- (2) 高温条件が前提となるため、萎縮症状の発生抑制にあたりハウス内気温にも十分注意する。
- (3) 育苗時だけでなく、本圃定植後にも発生する可能性があるため注意する。

6 試験課題名（試験期間）、担当

現地支援・緊急対応のための調査研究事業：「あまりん」の萎縮症状発生の要因究明（2024年）、野菜育種担当